

事例報告

中堅看護職者の看護評価力の向上

——自己事例の検討を通して——

岡部喜代子 名原 壽子 大名門裕子
花野 典子 細野喜美子

【要 約】 これは、看護現場を支える中核的存在である中堅看護職者に対する研修とその結果に関する報告である。研修目的は、自己事例を評価する過程を意図的にたどる事で、自己の看護する力を正当に評価し、他者に対して自己の実践を「事実」で語る能力をつけることである。期間は2ヶ月にわたる8日間であった。参加者全員が「現在進行中の事例」もしくは「心にわだかまりのある過去の事例」をとりあげ、この研修を通して、自己の看護の価値に気づくことができた。スケジュールの到達目標と日程とのバランスの取りかたなどの課題は残ったが、中堅看護職者の能力を高める手段として、効果的な方法であるという確信を得た事ができた。

【キーワード】 中堅の看護職者、看護評価力、看護の価値、実践事例の再構成

はじめに

地域に開かれた看護大学をめざして本学には看護研究研修センターが併設されており、開学直後から地域の看護職者に呼びかけて、職域別の研究会や任意の勉強会を定期的に開催している。

その過程で明らかになったことは、これまでに出会った各地域の中堅の看護職者と同様に、宮崎にも、自己の看護する力の価値に気づかず、次の一步へ踏み出せないでいる中堅の看護職者が多いということであった。

中堅の看護職者が自己の持てる力を正当に評価し、自信を持って示す事ができれば、所属している場の看護活動を活性化させ、その影響力は看護界全体のレベルを高めることにつながるであろう。

中堅の看護職者が自己の持てる力に気づくためには、自己の看護実践をふりかえり、事実にもとづいてその状況を再構成し、そのなかに対象の看護の必要性に応える関わりがあったのかを看護一般^{*1}にてらして分析し、実践の意味を他者に伝わるように表現する能力を身につける必要がある。

そこで、私達は、中堅の看護職者に対して、自己の看護する力を評価するための取り組みの場をつくることを思い立った。

I 研修の実施方法

1. 研修のねらい

日常の実践における看護評価力^{*2}を高める。

2. 研修の企画

1) 研修プログラム

本学における看護職者にとっての生涯学習への基礎づくりの一環として、今回、中堅看護職者を対象として、表1のプログラムを企画した。

企画にあたっては、私達がこれまでに出会った各地域の中堅の看護職者の実情を踏まえて、参加しやすくかつ研修効果が上がるようとに次の点を考慮した。

まず、ステップを区切ってそれぞれに到達目標を設定し、段階的に全過程の終了をめざせるようにした。

日程は、金曜や土曜を研修の日とし、個人ワークや実践に生かすことが可能な間隔を置いた。

また、グループワークを積極的に取り入れることによって、お互いの実践を伝え合い学び合う体験を通して、表現力を高めることも意図した。

2) 参加者の募集

平成11年6月5・6日開学記念日公開講座「21世紀のケア学」参加者のうち、看護職者に向けて研修プログラムを配付した。

II 実施結果

1. 参加者の概要

1) 参加者の背景

参加者は14名であった。所属別にみると臨床看護婦6名、大学の助手を含む教育関係者が6名、その他、行政、ケースワーカー、事務職が各1名。経験年数は5年を最低に10年未満が6名、10年以上2名、20年以上（30年1人を含む）が6名。臨床看護婦は1人を除いていずれも20年以上の経験者で、研修結果を即現場に反映させ得る中堅以上の指導者層の人々であった。

2) 参加動機と参加の継続

参加動機は、次の3つに分けることができた。

- ① 直接看護実践に役立てたい
- ② 自分がおこなっている看護に満足できず、解決の糸口を得たい
- ③ 新しい看護方法や考え方を知りたい

参加者は5～20年の看護経験をもつ者であり、所属する職場で日常業務を推進しながらも、自己の看護実践に満足できず、具体的な問題意識をもっている人達であった。このため14名中12名が当日までに自己事例を文章化してもらったり、すべての参加者が自己の実践をグループ内で発表し、積極的に参加していた。参加動機の①と②の参加者はプログラムのステップにそって、着実に学びを深め、到達レベルはさまざまであったが、各自達成感を得て終了できている。しかし、③の新しい看護方法や考え方を求めて参加した2名は、プログラムの進行につれて出席がみられなくなった。

3) グループ編成

グループの編成にあたっては持ち寄られた事例のアウトラインの記述を手がかりに、がんなどのターミナル期の看護と自閉症を含む精神領域の看護事例のグ

ループと、他方は、慢性の経過を支える臨床並びに在宅看護の事例のグループの2グループとした。

2. 研修過程と参加者の気づき・学び

1) 研修の方向づけ

開講に当って学長から、スザンヌ・ゴードンの『ライフサポート』¹⁾を引用しながら、「ナースは語れる人にならねばならない」という提言があった。「看護婦であれば看護実践を再現できる筈である。事実が語れる、その次に必要なのは、再現したものの中から、どういう法則性があるか、実践から言語化できることである。」このような研修の方向づけで出発した。

《ステップ1》

ステップ1では、自己の実践例を他者にわかりやすく表現し、部分的にはプロセスレコードを活用しながら再構成するという方法で進めた。グループ討議の中でグループメンバーからの質問や感想、また助言を通して、自己の看護の実践上の課題が次第に浮ぼりにされていった。参加前には気づくことができなかつた問題や課題について、参加者自ら発見し語っていくというプロセスの中から気づきを得ていった。

《ステップ2》

ステップ2では、ナイチンゲール看護実践論の講義を受講する中から、ステップ1の課題とつながり、実践と理論をつき合わせるディスカッションを通して、看護の方向性と課題が更に明確になっていった。臨床看護婦である参加者はステップ2の後半は、研修での気づきを現場の人々と共有したり、現場で実践する中から「今までとは違う看護が動き始めた」と、喜びとともに研修の場で報告するようになった。

2) 事例の再構成

このような研修の経過を参加者個々に焦点をあて、表2にまとめた。これらは出されたレポートやグループワークの中でのディスカッションから、発言や意識が追える8事例で、大きく「現在進行中の事例」と「心にわだかまりのある過去の事例」に分類した。

現在進行中の事例は、グループワークでの気づきが即実践の場で確かめられ、看護の中に生かすことが可能であった。「実際にチームの中になげかけ、看護を発展させることができた」などと報告された。

たとえば、大きな変化をもたらしたA事例を提出し

表1 研修プログラム

宮崎県立看護大学

研修内容 開催日時	学習上の目標	展 開	指導上の留意点	備 考
8/20(金) 9:00～ 16:00	ス テ ッ プ 個の看護実践を互いに共有し、関係を形成する	① 自己の看護実践(600～800字程度に書いたもの)をグループ内で発表し合う ② 感想・質問・意見を出し合う ③ 他者にわかりやすい表現に再構成(翌日までの課題)	共感によってくつろげ、高めあえる グループ形成に重点を置く関わりをする(事実を語り合える雰囲気づくり、説明する—聴く関係の中で自分の実践が明らかになるように)	持ち寄る看護実践 ・印象に残った事例 ・困難だと感じた事例 ・予想外の反応があった事例 ・発見があった事例 ・成功例
8/21(土) 10:00～ 16:00	ス テ ッ プ 1 グループダイナミクスを活用して看護実践上の課題を明確にする	④ ③の発表とグループ内の質問・感想・助言により看護実践上の課題を浮き彫りにする ⑤ 場面の再構成「看護婦の認識」「看護婦の表現」「患者の反応」の3項目で整理	語り合いの中での気づきを生かして場面がリアルにわかるように再現することを促す	
8/27(金) 9:30～ 16:00	ス テ ッ プ 2 看護実践の振り返り 実践上の課題を理論と結びつけ方向性を学ぶ	⑥ 修正した再現場面で看護実践を振り返る ⑦ ナイチングエール看護実践論の講義を受ける(自分の実践とつき合わせて講義を聞く) ⑧ 自己の事例に理論をつかって解く 講義 グループワーク	・対象にとって看護であったかで振り返りその人の傾向への批判にならない配慮をする ・見える記録例を示す ・似たような事例を出してもらう(私の事例を検討してほしい気持ちをつくる)	
9/4(土) 9:30～ 16:00	ス テ ッ プ 2 看護実践の振り返り 実践上の課題を理論と結びつけ方向性を学ぶ	同上		
9/11(土) 9:00～ 16:00	ス テ ッ プ 2 看護実践の振り返り 実践上の課題を理論と結びつけ方向性を学ぶ	同上		学んだことを生かして実践する
9/25(土) 9:00～ 16:00	ス テ ッ プ 3 評価 患者にとってどういう看護だったと言えるのか	個人ワーク or グループワーク		実践したことをもとに評価する
10/2(土) 9:00～ 16:00	ス テ ッ プ 3 評価 患者にとってどういう看護だったと言えるのか	個人ワーク or グループワーク 発表		

た参加者は、対象のとらえ方、対応の変化をチームの仲間と共有し実践することで、13年続いたトイレ以外での放尿がなくなり、トイレの水飲み行動も水の要求に変わったという成果をあげている。患者の変化と看護婦の積極的な働きかけは、その後、医師をも動かし、薬の使用量を5分の2に減らすことが実現し、問題行動を薬物で抑制する治療法が副作用によって患者の問題行動を助長していたという悪循環を断つという成果につながった。また看護の専門性を認めた医師は、今後看

護婦との事例検討会をもつことを提案してきたと報告している。その参加者は、「ワークを通して、自閉症の特徴がとらえられ、プロセスレコードで自己の看護過程を振り返り、その人の主観に近づく見方をすることで“どんな行動にも意味がある”と思えるようになり、注意深くみていったことが良かった」と学びのプロセスを振り返った。また、「研修で事例をまとめたことが自信につながり、スタッフへの協力を求めることも容易にできた」と研修成果を語った。

B事例を提出した参加者は、現場の仲間と学びを共有することを通して、技術の練習やアドバイスを互いにし合うなど、前向きにとり組み始めた職場の変化を述べ、最終日の感想でも、「今回のワークは苦痛だったけど看護のありようがみえたときは楽しかったし、この20年見えなかった光がみえたことが嬉しい」と研修成果の心境を述べていた。

一方、心にわだかまりのある過去の事例をとりあげたグループでは、わだかまっていた理由を明らかにし、そこから 看護者としての自己の傾向に気づき、対象の見方やとらえ方が見えることによって看護の方向性を見出すところまでワークが進んだ。

D事例を提出した参加者は、「看護婦への不満や苛立ちは多い患者で、患者同士のトラブルメーカーであり、短気で気難しい人」と患者像を描いていたが、婦長の役割である調整者として患者に対応している自己の関わりを見出すことができた。それは全体像やプロセスレコードを通して自己の対応過程を振り返ることで、単なる偶然がさせたのではなく、専門職としての知識や意志が無意識に働いていることの自覚をもつことができたことによる。

またE事例を提出した参加者も、がん末期の34歳の母親に、満開の桜をみせるためにベッドによる院外散歩を試みたことで、限られた命の時を子どもとの交流で過ごすことのできたことは、単なる偶然ではない、人間を人間としてみつめるという看護一般を媒介にして、看護の専門性に気づく学びができるに至った。

いずれの場合も、実践状況を「事実」で再現することはかなりの時間を要し、ステップ3まで到達した人は数名にとどまった。しかし、グループでの語り合いの中で、看護場面をリアルに再現する作業をくり返す中で、参加者の大半は、人の心を動かす語りができる大きさを実感するとともに、看護職者は知識を動員して行動し、それを描く力を身につけることの大切さに気づいた。

今回、臨床で即実践にうつせる可能性のなかった参加者にとっても、グループワークを通して、参加者の様々な実践例を追体験する機会となった。

III 考 察

看護職者にとっての生涯学習への基礎づくりとして、中堅の看護職者に対して、自己の実践事例をみつめて看護評価力を高めることに焦点を絞った研修会を試みた。参加者は自己の直面していた看護上の課題を解決しただけでなく、自己の看護する力の価値に気づき、自信をもって周りに影響を及ぼすまでに変化した。この変化は研修の結果生じたのであるから有用な取り組みであったと判断し、企画も含めて考察を加える。

1. グループワークによる事例の再構成の効果

研修効果を高めるために、グループダイナミクスを活用したが、はじめて出会った者同志が自己の実践を語り合うことによってお互いの体験を共有し共感しあう過程でたちまちうち溶け合っていった。参加者同士が自己の経験を生かして理解し合いつつ、率直な応答により刺激しあう場が形成されたといえる。特に、事例を再構成する過程において、質問に応じる時には自己の実践場面に一旦立ち戻って、その時の対象と自己とを想起して両者の関係の流れを鮮明に描いてその内部構造に分け入る必要がある。

そのような頭脳活動を経て場面再現に必要な情報を選択してグループに持ち帰り答えることになる。これを他者に伝えることによってますます自己の実践が鮮明になる。

この繰り返しの中で参加者同士が、どのような対象にどのような看護が展開され、その結果対象がどうなったかを体験に近づいて納得していくプロセスを共に辿り、他者の実践をも自己の内面に取り入れができるのである。すなわち、自己の実践場面をもついてグループで交流し、実践場面とグループワークをしている現在の場面とを観念的に往復しつつ事例を再構成することは、事例を生き生きと把握する力や他者に伝える力を高めるだけでなく、他者の実践から学ぶ効果もある。

2. 中堅看護職者にとっての事例の再構成と追体験の意味

ほとんどの参加者は、ステップ1の段階で看護場面の再構成を繰り返し、その度毎により深く具体的に気

づいて再構成しなおす取り組みをした。対象に対して半ば無意識的に瞬時にかかわっていた参加者には、自己の看護実践場面を再構成する取り組みを通して、意識の底に沈んでいた実践場面に立ち戻り、その時の情景とともに自己の認識をも呼び覚まされ、対象を観念的に追体験する感性が高まり、生き生きとした場面の再構成が可能になったと考えられる。

また、経験豊かな看護職者が自己の実践場面を掘り起こすことによって、経験則としてたくわえられていた自己の潜在能力にも気づいて意欲が高まることにつながった。

3. 看護評価力の活性化

自己の実践例を持ち寄りグループダイナミクスを活用しつつ自己の実践状況を鮮明に捉えて再構成する過程に多大な時間とエネルギーをそいだことで、自己の実践を看護をうける立場に立って評価する意識へと変化しその姿勢が定まっていた。

この段階に至り、ステップ2で受けた看護理論の講義によって、事例のみならず日常の看護実践も含めて、対象の立場から評価するための判断規準が定まり、看護評価力が活性化したと考えられる。

特に、現在進行中の事例を持ち込んできた参加者は、実践の場で積極的に展開し、周りへの働きかけを開始するに至っている。これは、ステップ1で対象像を描きつつ対象の感情を深く追体験した段階で、ステップ2において看護一般にてらして事例を見つめ直し、対象を放置出来ない気持ちに突き動かされた結果の変化と考えられる。まさに、スザンヌ・ゴードンのいう「知識に裏付けられたケアリング」²⁾が行われることを通して、看護の専門性のイメージづくりができたといえよう。

4. 参加動機と参加意欲

プログラムにおいて、達成課題および学習上の目標と展開を具体的に提示したことは、講師と参加者の目標とを一致させ、それらを確認することで初期の段階から両者が安定した関わりを形成することを可能にした。参加者がプログラムにそって自発的に個人ワークをすすめ、着実に研修を重ねる道標の役割を果たし、参加意欲が高まった。

また、参加にあたって自己事例を持ちこむことによって、研修の場に検討課題を提起する事になり、主体的な参加を動機づけられていった。

一方、研修途上の参加者の反応から、特に焦点をしぼったねらいと段階化した達成課題のある研修プログラムでは、参加者の研修への期待とグループワークへの参加度や課題達成意欲とが密接に関連することが明らかになった。研修前の段階で参加動機や準備状態を把握し、企画者側の意図と参加者の期待とが重なる方向で調整する必要性がある。

IV 今後の課題

成人にとっての生涯学習は、当事者の問題意識にもとづいて自発的な意志で参加しようとする研修会を企画し、参加者のニードに沿って運営出来るかどうかにかかっていると言われる。今回の研修によって、中堅の看護職者自身が、自発的な意志で参加して学び、現場で実践しつつ着実に向上していくような生涯学習の場をつくることは意義があると確認できた。今後の実現に向けて、研修結果から明らかになった具体的な課題を以下に列記する。

1. 目標設定に関して、ステップ毎の到達目標と日程とのバランスを振り返ると、実践状況を事実で再現するステップ1に大半の時間を要した。ステップ1の目標展開をより充実させると同時に各ステップの日程配分を再考する必要がある。
2. 参加者の募集に関して、企画者側の意図を伝えるとともに参加動機や研修への期待を把握して、両者の目標をできるだけ一致させる方向で対応する必要がある。
3. 日程に関して、全日程に参加できた者は半数に満たなかった。夏期休暇中や金曜日土曜日の是非、全期間の長短、間隔の置き方など、研修への参加のしやすさと効果の両側面から再検討する必要がある。
4. 事例検討が中心であるから、疾患の病態、薬理作用、各発達段階の一般的特徴、健康の各段階の一般的特徴など専門知識をその場で確認しつつ研修を進めるために研修環境を整備する必要がある。文献の利用について、図書館を利用できる時間帯に研修を組むことも必要であろう。

用語の定義

- * 1 看護一般：ナイチングールの「看護とは生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えること」をさす
- * 2 看護評価力：自己の看護実践を客観視し、看護一般にてらして論理的に表現出来る力

引用・参考文献

- 1) スザンヌ・ゴードン、勝原祐美子、和泉成子訳：ライフサポート、日本看護協会、1998
- 2) スザンヌ・ゴードン、早野真佐子訳、目に見えにくい看護の仕事の擁護：『ライフサポート』とジャーナリズムの責務：看護51(7)：65、1999

表2 研修過程と参加者の気づき

1) 現在進行中の事例

事例	参加の動機	セミナーの過程での研修者の気づき	気づきをどう実践に生かしたかまたは生かそうとしているか
A氏／28歳／男性 自閉症、最重度精神遅滞 2歳半～3歳頃急に声がでなくなった。 養護学校に入学した頃はおとなしかった。 3年生の頃から多動で、自分の要求が通らないとトイレで排尿するときに看護者・他者を噛み付く、突き飛ばすなどがみられた。6年生になると家族が体力でかなわなくなり入寮となった。中学部に入ってから身の回りのこともできなくなり他者に対する粗暴な行為も激しくなり、15歳時精神科病棟入院となる。集団行動がとれず強くすすめるとパニックを起こす為という理由。	Aさんがトイレで排尿している時にBが誉める関わりをしようとしている場面 夕方パジャマ更衣を援助して挨拶して別れる場面 Bがついてきているか確認するようになった場面 看護者の反応を見ながらトイレの便槽の水を飲もうとしている場面 等を通して看護の方向性を見いだしたい。	ほとんどの患者さんは言葉がでなくて感情を行動で示しているなど感じた。ケアをしていくうちに一人一人の患者さんの行動の意味を理解したいと思うようになった。水をたくさん飲む理由をAさんの立場になって考えてみる必要がある。トイレの水を飲む行為は人間的ではない。なぜ決められた時間に決められた量の水分しか与えないのか。なぜトイレ以外の場所で排尿するのかやめさせたい。どんな方法が有効か今までの叱ったり注意することは効果がないようだ。身体が欲しているにもかかわらず満たしてもらえない社会関係のなかで精神を安定させることが難しかったと思われる。どんな行動にも意味がある。対象の実体・認識・社会関係のありかたを見つめてその意味をとらえると看護の方向性がみえてくる。私たちの関わりがAさんにとっての社会関係であって私たちがその関わりをふりかえらなければAさんの認識を整えることができたかどうか分からぬ。	アドバイスを元に第一と第二の関心を深めるために自閉症とはどのような障害かをとらえなおしAさんの理解をすすめる。障害の特殊性をおさえAさんの生活体験を想像したり、反応を観察するとAさんの行動が理解しやすくなった。Aさんの立場になって感情も予想するようになった。 具体的な行動計画をカードックスに記載しスタッフで共有するようになった。 自分の言動をいつも反省しながら、またAさんの行動をじっとみつめてきた。自分の看護に不安を感じたときにその不安を表出することで協力やチーム力を発揮してもらえることがわかった。 セミナーで何気なく発した言葉をすくいあげられそのことに注意をむけることができ問題解決の糸口になった。 セミナーのまとめを担当医師に見ていただき看護の重要性を指摘された。 病棟担当の医師の発案で事例検討会をもつ計画がおきている。
B氏／69歳／男性 S状結腸癌、肝臓転移 S状結腸腫瘍切除・胆囊摘出術・リザーバー植え込み術後退院。 2週間に1回抗ガン剤動注のため通院し2年経過。腹部膨満感・食欲低下出現し入院。	温暖な気候と同じように、住民の性格も穏やかに感じる日南地区でこの患者さんは、看護婦に対する不満や要望を直接口にして来られた数少ない患者さんであった。なぜ患者さんが満足されず、自分自身もすっきりすることが出来なかったのかを知ることで看護の方向性がつかめるのではないかと考えた。	自分が気になった場面をプロセスコードにすることから、全ての場面が中途半端で終わっているため、ずっと患者さんの言葉が気になっていたことがわかった。対応が難しい場面になると幸いな事にナースコールが鳴ったり、他の看護婦に呼ばれたりして、患者さんをいつも不安定な状態で放置していた。ターミナル期にある患者に対して、看護婦は快を得ていただくことにエネルギーをそそぐべきであるが、訴えている患者さんに対し、看護婦の私の頭はスタッフを弁護することに懸命であり患者さんの頭の中を知ろうとしていない。	「患者に沿った考え方」ができるかどうかで対応が変わってくることを頭にいれてプロセスコードを見つめなおした。自分を含めて卒後教育の大切さを感じた。気になること何か変だなと思うことはそのままにせず口に出して納得できるまで話し合ったり、検討し解決策を見つけることだ。お互いが技術を高め合うために練習したり、その場にいた他の看護婦がアドバイスをする状況が出てきた。勧められた図書を読み「気をつけんといかんですね」という言葉が聞かれた。患者の教えを有効に生かせるように病院で取り組む問題、病棟で取り組む問題、個人だけで解決できることについて改善に向けて協力し合う職場づくりを心がけようと思う。

C氏／79歳／男性 脳出血後遺症、左上下肢麻痺 妻75歳／2人暮らし 入院当初はリハビリも順調に進んでいたが、喫煙歴が長く嚥下の障害と繰り返しの発熱のため経管栄養となった。このため全身状態が低下しリハビリがすさまなくなり、付き添っていた妻から家につれて帰りたいと。 妻に経管栄養、吸引など指導し退院。1週間で吸引が十分にできず、再入院。 妻に再指導し、行政および民間の在宅サービスを利用できる状態に整え退院。現在在宅1ヶ月半を経過している。	看護職であるが、現在は、ケースワーカーとして勤務している。直接ケアすることより他職種間の調整役をしていく。この事例には再入院後、再度退院に向けて、妻に直接指導した。妻の年齢から考えても、自宅につれて帰ったことがよかつたのかを考えたい。	ケースワーカーとしての立場で直接ケアすることより、調整役として役割が大きい中で、限界を感じていた。今回、看護者としてこのケースの看護を考えていく中から、妻の指導を中心に考えていたが、患者自身にある残存機能に目を向け、妻に全面的に依存するのではなく、できることは自らがする方向で指導していくという方向性に気づいた。また研修中、グループワークの過程から、自分の考えを言うばかりではなく、他者の考え方をきいて調整していくことの大切さを学んだ。	このケースは肺炎を起こし現在入院中で退院の方向性は見えていない。しかしこのセミナーで得た日ごろ何気なくおこなっている看護からも理論は引き出せること、一つ一つ理論につなげる作業をたえず意識的におこなっていくことを実践していきたい。また他者の考え方をきき、自分の考え方を照らして考え方を見出していく努力をしていきたい。
---	---	--	---

2) 心にわだかまりのある過去の事例

事例	参加の動機	セミナーの過程での研修者の気づき	気づきをどう実践に生かそうとしているか
D氏／68歳／男性 肝臓癌 妻とは25年前に離婚。親戚、娘が近くにいるので大阪の病院より転院してきた。 長期療養に対する不安と頻回の点滴のトラブルに苛立ち、看護婦への不満、患者同志のトラブルなどで悩まされた。チームで頻回の訪室、多くの対話をもつこと、問題はその日のうちに解決できるよう努力した。退院後、元気であること何かあつたらよろしくと電話がありチームで喜んだ	日々看護する中でただ夢中でやってきた。婦長として患者によい看護をと思いつつ、若い看護婦の技術不足などから患者から不満や苦情が寄せられる。チームで看護の方向性をみつけるためにこの事例をふりかえり、看護とは何かをつかみたい。	患者の全体像をつかみ、他患者のスリッパの音がうるさいと文句をつけた場面をプロセスレコードにおこし、その過程を振り返る中で、そのときは必死で患者の気持ちをおさめよう、文句を言われた患者の状況を伝えようとかかわっていたが、その中から婦長として病棟全体を管理し、快適に患者の療養生活が送れるよう、整えようとしている姿があることがわかり、日々のかかわりが看護であると実感できた。また患者の家族が来たときには文句が少ないとや時には看護婦にねぎらいの言葉がきかれるなどの事実から患者の心のあり様を看護としてとらえる大切さに気づいた。	患者の言動から勝手に短気とか気難しいなどと患者像をつくってかかわっていたことに気づいた。プロセスから、患者のあるがままを見つめ、ケアしていくことをこれから実践にいかしていきたい。
E氏／34歳／女性 左乳房腫瘍摘出術後癌告知を受け化学療法、放射	3回目の入院時、長い闘病生活の中で、	まず、この患者に「何かしたい」という気持が起こっていること、34歳女性の本来の姿と目の前の患者の現状とのあきらか	対象を目の前にした時「何かしたい」と心が動き対象の状態にあわせて「どうあってほしい」という像を描いて、そのような状態に近づけるよう

<p>線治療し退院 8年後再発。骨・骨髓・脊髄転移のため放射線治療開始。5ヶ月後、化学療法、放射線療法を再度開始するが死亡。</p>	<p>患者と子供たちとの交流の時間をもつために、ベットごと院外散歩でかけることを計画し実施した。よい変化が起ったがどうしてそのような結果が現れたのかすっきりしない想いが残っていた。看護となったのかどうかを考えてみたい。</p>	<p>な違いがあること、「痛みが軽減され、残された時間を家族や自分のために有意義に過ごせる」(こうあってほしい像があった)ので、痛みから気持ちをそらすことをねらって散歩を計画した満開の桜を見ることが快の刺激となり、より一層患者を気持ちよくできるのではと考えていた。</p>
<p>F氏／56歳／女性／主婦 乳癌 一年前に受診した時点で既に全身骨転移があり、頸部圧迫骨折を併発（この時点で告知を受ける）放射線療法、化学療法を重ねるが脳転移、胸部・頸部の皮膚転移がみられ治療を続行中。 「自分も先生や看護婦さんがついているから18年生きることができるわね」と治療に励まれる。ある日、「私はもう歩けないの？頑張って治療してきたのに…今は歩けなくとも骨がよくなればまた歩けるのとちがうの」とショックを受けた様子で話された。</p>	<p>症状が悪化していくなかで症状や治療など表面的な患者の問題点に目が向いてしまい、患者の想いに立てていなかったのではないか。末期を迎えていく患者を見るにしのびなく、「患者のためにできる限りのことをしたい」と想い患者の処置やケアをすることで私自身が安心していたのではないか。 患者自身の持てる力や家族の支える力を引き出す援助が不足していたのではないか等、気づかされたところを高めて行けたらと思う。</p>	<p>私自身のなかに「ターミナル期にあるこの患者・だんだん悪くなっていく患者・もう治らない」等の想いを持ちながら接していることで患者から逃げようとした会話に終わっている。 前向きに考えている患者に対し「病状をわかっているのかな？・なんてのんびりしているの、時間を有意義に使いたい」等と考えてしまったが、何も患者が今の病状に気づく必要はないことがわかった。終末期にある患者が今の悪化していく病状を知ったからといって、つらい思いをするだけで何のメリットも得られない。反対に18年生きると考えている患者の想いにたてば違った方向への会話が進んでいく。 患者にとってどのようにあるのがよいのかを考える事が重要であると分かった</p>
<p>G氏／85歳／男性 山奥の一軒家に一人で生活し、水道やトイレなどの設備もない。近所や家族からの通報で保健所、福祉課が以前よりかかわっていた。妄想があふれ近所との付き合いもなかつた。 10年前下血があり、直腸癌の診断で人工肛門造設術。パウチ管理は自分で</p>	<p>医療保護入院前に幾度かケースを家庭訪問し、話を聞いていた。通報をきいて駆けつけたが手に負えない状態であった。しばらく話しをしていたらだんだん落ち着いていった。医療保護入院となり、入院先の病院を訪問した。患者はおだやか</p>	<p>このケースをナイチンゲール看護論の3重の関心をもとに振り返った。またかかりで気になっている4日間をプロセスレコードにおこした。はじめは不便、非衛生、困った環境になにか対策をとらなければならぬとの想いでかかわっていた。しかし患者はこの環境に十分満足していて、看護者との想いにズレが生じていて、看護活動を気に気がついた。入院後、病院での生活に不適応をおこしているだろうと思われる。患者は入院生活に適応して生活していた。入院させたことに罪悪感をもつ</p>

<p>できるが、袋を家の前に山積みし不潔。訪問時保健所へ持ち帰っていた。危険行為（ナタをふりまわす）と徘徊で近所、警察から通報があり、医療保護入院となる。入院後は落ち着いて、トラブルもなく入院生活を続けている</p>	<p>に話しをし、食事もとって、入浴もしていると言った。入院させたことが患者にとってよかつたのかを明らかにしたい</p>	<p>ていたため気になっていたが、医療的環境が老人の体の環境を整え、精神も安定させたことに気づいた。また、退院後に向けて、これから加齢にともないできなくなることが増えることを考え、これから的生活調整のための地域での受け皿づくりの必要性を認識した。</p>	
<p>H氏／60歳／女性 A L S（筋萎縮性側索硬化症） 呼吸苦、発言障害はあるが、同室者との輪を大切にし、たまには冗談も言う 歩行はできるが、両上肢をまったく上げることができない。3～4ヶ月後、呼吸器装着。 その後、3ヶ月を経て他界</p>	<p>この事例は、新任のころ出会った。両上肢をまったく上げることができないため、頻回のナースコール。忙しさに追われていると「またか」と思ってしまう自分。呼吸器装着後、吸引していると4～5cmの痰の塊、さぞ苦しかったろうと思いつが痛んだ。看護者の気持ちは態度から相手に伝わり、いつか自分に返ってくるということを教えられ、この事例からもう一度看護を考えたい。</p>	<p>この事例は過去の新任のころのものであり、記憶もはっきりしない部分が多くあった。その中で全体像を明らかにしていく過程から、この患者の看護の必要性を見出すことができた。学生のとき以来看護過程にじっくり取り組むことができ、看護のおもしろさを感じることができた</p>	<p>現在は看護職ではなく、もう1度看護婦として働く方向で考えるチャンスとなった。看護を考えるプロセスを実践で展開してみたい</p>

Report on Ways of Improving Middle Experienced Nurses' Self Evaluation — Analization of Their Nursing Experiences —

Okabe Kiyoko, Nahara Hisako, Ohnakado Hiroko
Hanano Noriko, Hosono Kimiko

業績一覧

1 著　書

表　　題	発行所	発行年月日	著　者
1. 化学療法の領域, 13, 増刊号「Emerging infections diseases and reemerging infectious diseases. ツツガムシ病」 p 129-134	医薬ジャーナル社	1997. 4	橋　宣祥
2. 日本歴史地名大系、宮崎県の地名「歴史民俗に關わる総論及び地名記事」 p 28-31, p 40-42, p 75-76, p 121-122, p 125, p 146-147, p 201, p 204-206, p 216-217, p 219-220, p 230, p 269-270, p 276-277, p 279, p 294-295, p 311-312, p 374, p 380, p 412-413, p 424, p 451, p 482, p 505, p 517-518, p 527-528, p 560, p 562-564, p 622, p 630, p 684	平凡社	1997. 11	山口保明 (編集委員)
3. 治療薬ガイド'98 「ポリペプチド系抗菌薬」 p 591-597	文光堂	1998. 2	Medical Practice 編集委員会編 (和田 攻、大久保昭行、永田 直一、矢崎義雄編) 井上松久 久我明男 島内千恵子
4. 祭礼行事、宮崎県 「祭礼行事の解説」 p 60-66, p 76-79, p 87-90, p 95-96, p 98-100, p 104-106, p 108-109, p 112-114, p 117-119	おうふう	1998. 2	山口保明 (監修)
5. 宮崎県史、別編、民俗「神楽囃と生活囃」 p 410-463 「山仕事と民具」 p 554-587	宮崎県	1998. 3	山口保明
6. 最新運動生理学実験法 「酸化還元酵素活性の測定法」 p 143-146	大修館書店	1998. 7	編集： 今泉和彦 石原昭彦 田中美智子 大平充宣 大村典子
7. 大村典子 “日本のうた” ファミリー連弾集 (全3巻)	音楽之友社	1998. 11	監修： 大村典子
8. 大村典子 “日本のうた” ファミリー連弾集 (ミュージックデータ・全3枚)	シーミュージック	1998. 11	監修： 大村典子
9. 大村典子 “日本のうた” ファミリー連弾集 (CD)	シーミュージック	1998. 12	須永清 落合敏
10. 看護学基礎講座 栄養学	真興交易株医書出版部	1999. 1	

表題	発行所	発行年月日	著者
11. 治療薬ガイド1999～2000 「ポリペプチド系抗菌薬」 P 600-606	文光堂	1999. 2	Medical Practice 編集委員会編 (和田 攻、大久保昭行、永田 直一、矢崎義雄編) 井上和久 久我明男 島内千恵子
12. 日本臨床 別冊、領域別症候群シリーズNo24, 感染症症候群 II、「つつが虫病」 P 288-293	日本臨床社	1999. 2	橋宣祥
13. 日本臨床 別冊、領域別症候群シリーズNo24, 感染症症候群 II 「塹壕熱」 P 294-296	日本臨床社	1999. 2	橋宣祥
14. 中山宏明、多田功、南嶋洋一編、知っておきたい現代感 染症事情 1「ツツガムシ病」 P 44-49	医歯薬出版社	1999. 2	橋宣祥
15. みやざきの101人 (本人、企画、部会委員) 「明治、大正、昭和人物誌」 P 5-6, P 13-14, P 19-20, P 27-28, P 35-36, P 61-62, P 69-70, P 79-80, P 127-130, P 153-154, P 181-182, P 193-194	宮崎日日新聞社	1999. 3	山口保明
16. 地域看護学講座 ① 地域看護学総論第2版 第6章地域看護活動の軌跡 P 174～185 P 196～208	医学書院	1999. 3	名原壽子
17. 陸上競技を科学する「ハードル走のパフォーマンスを向 上させるトレーニング手段の検討」 P 42-49	道和書院	1999. 3	編集： 関岡康雄 串間敦郎
18. 最新医学 3月増刊号 感染症とその治療 —新しい視点 から— 前編細菌感染症、「つつが虫病」 P 231-238	最新医学社	1999. 3	橋宣祥
19. 晩節を生きる	朱鷺書房	1999. 9	汲田克夫 (単著)
20. 巫覡・盲僧伝承世界 「吉野宮の盲僧伝承」 P 308-327	三弥井書店	1999. 10	山口保明
21. 大村典子ハッピーコーラス (全3巻)	音楽之友社	1999. 10	大村典子
22. 形態機能学「泌尿器系」 P 202-224	真興交易医書出版	1999. 12	監修： 石川稔生 編集： 根本清次 田中美智子
23. 感染症の診断・治療ガイドライン、「ツツガムシ病」 P 136-139	日本医師会／医学書院	1999. 12	橋宣祥

表 題	発行所	発行年月日	著者
24. 典子のハートフル・コミュニケーション～親・教師・看護者など、人と関わるすべての方々に向けて	音楽之友社	2000. 2	<u>大村典子</u>
25. 新研究資料、現代日本文学 第6巻 俳句 「吉岡禪寺洞」 P155 「篠原鳳作」 P246	明治書院	2000. 2	<u>山口保明</u>
26. 日之影町史・資料編3 暮らしと芸能 「ふるさとに継ぐ 解説編、VHS映像(83分)」	日之影町	2000. 3	<u>山口保明</u> (編集責任) <u>渡辺一弘</u>
27. 大村典子 大人のハートフル・ピアノデュオ(全3巻)	ヤマハミュージックメディア	2000. 3	<u>大村典子</u>

2 学術雑誌等掲載論文

表 題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著 者
1. 力は出るもの出せるもの —ひとりひとりの可能性を信じて	婦人之友 91(4) : 15-27	1997. 4	久保田 競 安積力也 大村典子 山岡真巳子
2. 感染 Rickettsia tsutsugamushi の血清型によるつつが 虫病の臨床所見の解析	感染症誌 71(4) : 299-306	1997. 4	志賀耕二 小河正雄 小野哲郎 橘宣祥
3. 「統計学」という名の魔法の杖 — X	季刊総合看護 32(2) : 61-70	1997. 5	本田克也 浅野昌充
4. Increased expression of interleukin-2 receptor α on peripheral blood mononuclear cells in HTLV-I tax/ rex mRNA-positive asymptomatic carriers.	Journal of Acquired Immune Deficiency Syn- dromes and Human Retrovirology 15 : 70-75	1997. 5	Okayama A. Tachibana N. Ishihara S. Nagatomo Y. Murai K. Okamoto M. Shima T. Sagawa K. Tsubouchi H. Stuver S. Mueller N.
5. Progressive retinitis-encephalitis due to ganciclovir- resistant cytomegalovirus associated with aplastic anemia.	Internal Medicine 36 : 375-379	1997. 5	Sasaki T. Okayama A. Eizuru Y. Murai K. Matsuoka H. Uno H. Minamishima Y. Kataoka H. Koono M. Matsukura Y. Naoi N. Sawada A. Tachibana N. Tsubouchi H.
6. 精神医学とは何か — 科学的精神医学の確立 — (4)	季刊総合看護 32(2) : 73-79	1997. 5	布施裕二
7. ナイチングール看護論と科学的看護論	季刊総合看護 32(2) : 3-14	1997. 5	薄井坦子

表題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著者
8. 男子400m走におけるレース分析について	身体運動のバイオメカニクス—第13回日本バイオメカニクス学会大会論文集 P 206-210	1997. 6	安井年文 小木曾一之 青山清英 串間敦郎
9. <上>が<下>の反義でなくなるとき：日本語複合動詞における後項動詞	慶應義塾大学芸文研究 72	1997. 6	川北直子
10. Prevalence of genotypes of Orientia tsutsugamushi in patients with scrub typhus in Miyazaki prefecture.	Microbiology and Immunology 41: 503-507	1997. 6	Horinouchi H. Murai K. Okayama A. Nagatomo Y. <u>Tachibana N.</u> Tsubouchi H.
11. 精神を病む人々への看護学的視点	精神保健 42: 1-8	1997. 6	薄井坦子
12. 看護婦の臨床判断能力の経験による変化	愛媛医学 16(2): 81-90	1997. 6	中野静子 <u>岡部喜代子</u> 三瀬直子 奥村純子
13. 初対面の患者における看護現象の情報化の構造 —精神病院における看護実践の分析を通して—	千葉看護学会会誌 3(1): 55-63	1997. 6	赤星誠
14. Heterosexual transmission of hepatitis C virus among married couples in southwestern Japan.	International Journal of Cancer 72: 50-55	1997. 7	Tanaka K. Stuver S.O. Ikematsu H. Okayama A. <u>Tachibana N.</u> Hirohata T. Kashiwagi S. Tsubouchi H. Mueller N.E.
15. 宮崎県の民俗芸能(三) 「かぐらを観座に」	みやざき民俗 51: 6-21	1997. 8	山口保明
16. 「統計学」という名の魔法の杖— XI	季刊総合看護 32(3): 84-94	1997. 8	本田克也 <u>浅野昌充</u>
17. 精神医学とは何か—科学的精神医学の確立— (4)	季刊総合看護 32(3): 26-32	1997. 8	布施裕二
18. うつ病の認知機能に関する事象関連電位を用いた研究	精神神経学雑誌 99(8): 555-574	1997. 8	齊藤秀光 松岡洋夫 上埜高志 布施裕二 佐藤光源

表題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著者
20. 分娩期に起こる産婦の眠気—助産学的視点から考える	助産婦雑誌 51(9): 21-27	1997. 9	菅沼ひろ子
19. 大分県で発生した下痢原性食中毒の疫学的、細菌学的検討	日本食品微生物学会雑誌, 14(2): 115-122	1997. 8	渕祐一 緒方喜久代 帆足喜久雄 橋宣祥
21. 「看護覚え書」翻訳の弁証法的分析	ナイチンゲール研究 4: 49-55	1997. 10	三瓶眞貴子
22. 体験実習における看護学生の認識の特徴と指導上の知見—病院外来での体験実習より	ナイチンゲール研究 4: 3-10	1997. 10	寺島久美
23. 『看護覚え書』初版本と本邦訳に関する考察	ナイチンゲール研究 4: 41-48	1997. 10	名原壽子
24. 大船渡湾の成層と貧酸素水塊に関する現地観測	海岸工学論文集 44(1997): 1066-1070	1997. 11	長坂猛 鶴谷廣一 村上和男 浅井正 西守男雄
25. 「統計学」という名の魔法の杖—XII	季刊綜合看護 32(4): 41-47	1997. 11	本田克也 浅野昌充
26. 精神医学とは何か—科学的精神医学の確立—(49)	季刊綜合看護 32(4): 63-68	1997. 11	布施裕二
27. Detection of polyanion-restricted anti-histone antibodies in patients with systemic lupus erythematosus.	Internal Medicine 36: 781-786	1997. 11	Yamashita R. Tachibana N. Murai K. Okayama A. Tsubouchi H.
28. Yersinia enterocolitica stereotype O: 8 septicemia in an otherwise healthy adult: analysis of chromosome DNA pattern by pulsed-Field gel electrophoresis	Journal of Clinical Microbiology 35(12): 3346-3347	1997. 12	Shigeru Hosaka Masumi Uchiyama Mamoru Ishikawa Tohru Akahosi Hiromu Kondou Chieko Shimauchi Takeshi Sasahara Matsuhsa Inoue
29. 明暗サイクル逆転が身体及び妊娠に及ぼす影響	日本看護研究学会雑誌 20(1): 65-71	1997.	水田公子 田中美智子 木場富喜 須永清 石川稔生
31. 「統計学」という名の魔法の杖—XIII	季刊綜合看護 33(1): 75-80	1998. 2	本田克也 浅野昌充
32. 精神医学とは何か—科学的精神医学の確立—(50)	季刊綜合看護 33(1): 50-56	1998. 2	布施裕二

表 題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著 者
33. 「民俗文化財」	宮崎県の文化財 p 90-96	1998. 3	山口保明
30. 日向神楽について 「高千穂神楽を視座に」	巫覡盲僧学会報 10:1-4	1998. 2	山口保明
34. ストーマ造設者へのインフォームド・コンセントについて—鹿児島県内のオストメイトに対する生活実態についてのアンケート調査から—	鹿児島大学医療技術短期 大学部紀要 第8号 p 1-9	1998. 3	中野栄子 石澤隆 細野喜美子 田畠千穂子
35. 更年期女性のもつ心身不調とライフイベントとの関連	人間科学研究 6(3): 135-150	1998. 3	菅沼ひろ子
36. 家族看護学1 家族のなかで生活する対象を看護の視点でまるごとらえる新しい試み	季刊総合看護	1998. 4	岡部喜代子
37. 看護のための「いのちの歴史の物語」・1	季刊総合看護 33(2): 65-72	1998. 5	本田克也 浅野昌充 加藤幸信
38. 看護大学でなぜ自然科学の学びが必要か	季刊総合看護 33(2): 10-16	1998. 5	長坂猛 小河一敏
39. ナイチンゲールの夢を宮崎に —21世紀の看護学教育の方向性を探る—	季刊総合看護 33(2): 6-9	1998. 5	薄井坦子
40. ナイチンゲールの看護観による看護過程の展開 —実践による理論の証明—	月刊ナースデータ 19(5): 16-22	1998. 5	細野喜美子
41. <自己学習—グループ学習—個別指導—自己評価>システムによるモジュール学習の展開 —従来の看護技術教育の限界を乗り越えるための取り組み—	季刊総合看護 33(2): 21-32	1998. 5	嘉手苅英子 山本利江 和住淑子 山岸仁美 新田なつ子 寺島久美
42. Predictors of level of circulating abnormal lymphocytes among human T-lymphotropic virus Type I carriers in Japan.	International Journal of Cancer 77: 188-192	1998. 7	Hisada M. Okayama A. Tachibana N. Stuver S.O. Spiegelman D.L. Tsubouchi H. Mueller N.E.
43. 看護のための「いのちの歴史の物語」・2	季刊総合看護 33(3): 45-48	1998. 8	本田克也 浅野昌充 加藤幸信
44. 「看護人間学II」(精神の内部構造)で何を教えるか	季刊総合看護 33(3): 27-32	1998. 8	布施裕二
45. ナイチンゲールの夢を宮崎に(2) —看護基礎学の構築をめざしたカリキュラム—	季刊総合看護 33(3): 24-26	1998. 8	薄井坦子

表題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著者
46. 視聴覚教材とその活用の方向性	季刊総合看護 33(3): 33-44	1998. 8	山本利江 嘉手苅英子 和住淑子 山岸仁美 新田なつ子 寺島久美
47. 看護ケア内容の構造化と本質の共有	看護 50(10): 61-65	1998. 10	薄井坦子
48. いつでも、どこでも、だれにでも看護の心を差し出せる 基本技術の主体的な修得をめざして	季刊総合看護 33(4): 9-12	1998. 10	細野喜美子
49. 【特集】宮崎県立看護大学がとりくむ看護教育 家族看護論Iの授業を振り返る —「母性」「父性」を中心に—	季刊総合看護 33(4): 42-46	1998. 11	阿部恵子
50. 地域看護学：地域を活かし、家族を支え、住民とともに 健康な地域づくりができる力を育む ①地域看護学の理念と内容	季刊総合看護 33(4): 21-28	1998. 11	名原壽子
51. “地域で生活する家族”を対象として関わられる看護職者の 育成——フィールド体験実習の評価——	季刊総合看護 33(4): 29-36	1998. 11	小野美奈子
52. 看護のための「いのちの歴史の物語」・3	季刊総合看護 33(4): 59-63	1998. 11	本田克也 浅野昌充 加藤幸信
53. Epidemiologic typing of methicillin-resistant Staphylococcus aureus in neonate intensive care units using pulsed-field gel electrophoresis	Microbiology and Immunology 42(11): 723-729	1998. 11	Yumi Saito Keiko Seki Tomoko Ohara Chieko Shimauchi Yoko Honma Mutsumu Hayashi Shogo Masuda Masayasu Nakano
54. 戦略的抗菌療法のための感受性テスト	日本内科学会雑誌 87(11): 5-10	1998. 11	井上松久 久我明男 矢野寿一 島内千恵子 野々山勝人 岡本了一
55. <自己学習—グループ学習—個別指導—自己評 価>システムを活用した授業の実際	季刊総合看護 33(4): 13-20	1998. 11	栗原保子
56. 宮崎県の民俗芸能(四) 「かぐらを視座に」	みやざき民俗 52: 6-20	1998. 12	山口保明
57. 電気を感じる魚—ナマズ	地震ジャーナル 26: 52-59	1998. 12	浅野昌充

表 題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著 者
58. Why do antimicrobial agents become ineffectual?	Yonsei Medical Journal 39(6): 502-513	1998. 12	Matsuhsia Inoue Akio Kuga <u>Chieko Shimauchi</u> Hisakazu Yano Ryouichi Okamoto
59. A new aspect of the carotid body function controlling hypoxic ventilatory decline in humans	Applied human science 17(4): 131-137.	1998.	Kimura H. <u>Tanaka M.</u> Nagao K. Niijima M. Masuyama S. Mizoo A. Uruma T. Tatsumi K. Kuriyama T. Masuda A. Kobayashi T. Honda Y.
60. Possible presence of hypoxic ventilatory depression while breathing ambient air at sea level in humans.	PathoPhysiology 5: 149-154.	1998.	Masuda A. Chowdhury M.F. <u>Tanaka M.</u> Kobayashi T. Masuyama S. Kimura H. Kuriyama T. Honda Y.
61. 入院による環境の変化に対するストレス要因と対処	鹿児島純心女子大学看護学部紀要 3: 51-62	1998.	椎野志保 花田妙子 田中美智子 木場富喜
62. 看護のための「いのちの歴史の物語」・4	季刊総合看護 34(1): 49-54	1999.	本田克也 浅野昌充 加藤幸信
63. 周産期におけるプライマリーケアの実践報告 —助産院10年間の活動の軌跡—	助産婦 53(1): 13-17	1999.	菅沼ひろ子 串間秀子 池田利江
64. 山人の秘儀 「女猪狩りと獵犬の葬送儀礼」	自然と文化 60: 58-63	1999. 3	山口保明
65. 現代日本の医療における Quality of Life に関する研究	淑徳大学大学院研究紀要 6: 129-145	1999. 3	花野典子
66. ナイチンゲール看護論の学的構造—目的論・対象論・方法論の立体構造を探って—	ナイチンゲール研究 5: 53-57	1999. 3	薄井坦子

表題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著者
67. ストーマ造設者の早期自己管理を促進させる要因の検討 —鹿児島県のオストメイトに対する生活実態調査についてのアンケート調査から—	鹿児島大学医学部保健学科紀要 第9号 p17-22	1999. 3	田畠千穂子 中野栄子 石澤隆 細野喜美子 木脇靖子 丹羽清志
68. 看護のための「いのちの歴史の物語」・5	季刊総合看護 34(2) : 33-38	1999. 5	本田克也 浅野昌充 加藤幸信
69. 清拭技術の巧拙が被験者の皮膚温に及ぼす影響についての研究	月刊ナーシング 19(8) : 58-63	1999. 7	細野喜美子 中野栄子
70. 援助困難として訪問依頼を受けた事例の看護学的構造	千葉看護学会学会誌 5(1) : 47-55	1999. 7	小野美奈子
71. 看護のための「いのちの歴史の物語」・6	季刊総合看護 34(3) : 82-85	1999. 8	本田克也 浅野昌充 加藤幸信
72. 宮崎県の民俗芸能(五) 「かぐらを視座に」	みやざき民俗 53 : 36-52	1999. 11	山口保明
73. 看護のための「いのちの歴史の物語」・7	季刊総合看護 34(4) : 59-63	1999. 11	本田克也 浅野昌充 加藤幸信
74. On the double diffusive intrusion observed in the oyashio front region	Theoretical and Applied Mechanics 48 : 393-408	1999.	Nagasaki M. Yoshida J. Nagashima H. Matsuyama M. Kawasaki K. Yokouchi K.
75. 鉄欠乏又は低圧曝露が血液性状に及ぼす影響	登山医学 19 : 79-82	1999.	田中美智子 長坂猛 小林敏生 大平充宣 本田良行
76. 炭酸ガス—換気応答に対する頸動脈体の関与度の推定	登山医学 19 : 107-110	1999.	田中美智子 増田敦子 小林敏生 大平充宣 本田良行
77. 低酸素及び性差が炭酸ガス換気応答及び呼吸困難に及ぼす影響	登山医学 19 : 111-117	1999.	増田敦子 大藪由夫 田中美智子 小林敏生 本田良行

表 題	掲載誌名(巻, 号, 頁)	発行年月日	著 者
78. 鉄欠乏又は低圧曝露が血液及び心筋性状に及ぼす影響	登山医学 19:111-117	1999.	田中 美智子 長坂 猛 小林 敏生 大平 充宣 本田 良行
79. 看護のための「いのちの歴史の物語」・8	季刊総合看護 35(1):27-32	2000. 2	本田 克也 加藤 幸信 長坂 猛
80. 周産期母子保健指導における助産婦の役割	周産期医学 30(2):249-252	2000. 2	菅沼 ひろ子
81. 明暗サイクル逆転が母胎に及ぼす影響	日本看護研究学会雑誌 23(1):83-91	2000.	田中 美智子 長坂 猛 有松 操 椎野 志保 辻野 久美子 木場 富喜 石川 稔生 須永 清

3 翻 訳

表 题	発 行 所	発 行 年 月 日	著 者
1. 正しい体液・電解質のモニタリング 原著作名: Monitoring Fluid and Electrolytes Precisely	西村書店	1997. 7	監訳: 中野 稔 訳: 阿部喬樹 上原清 内田耕太郎 尾坂良子 樋木規容子 勝野久美子 菊池弘明 栗原保子 小島扶美子 斎明辞央 佐野文男 鈴木重統 須藤和彦 津田紀子 津田光世 戸垣和人 朝長まりこ 西村真美子 正村啓子 松村悠久子
2. ヘルスフィジカルアセスメント（上巻） 皮膚、毛髪、爪 p 62-88	日総研出版	1998. 6	監訳: 花田妙子 山内豊明 中木高夫 田中美智子 内海滉
3. ヘルスフィジカルアセスメント（上巻） 呼吸器 p 208-243	日総研出版	1998. 6	監訳: 花田妙子 山内豊明 中木高夫 田中美智子 山内豊明 花田妙子

表 題	発行所	発行年月日	著者
4. ヘルスフィジカルアセスメント（下巻） 睡眠のアセスメント p 150-165	日総研出版	1998. 9	監訳： 花田妙子 山内豊明 中木高夫 田中美智子 本田良行 薄井坦子 小玉香津子 田村真 小南吉彦
5. 看護覚え書（第6版）	現代社	2000. 1	

4 報告書・その他

表 題	発行所	発行年月日	著 者
1. 看護婦の生涯学習のあり方に関する研究	平成9年度厚生省看護対策総合研究事業(主任研究者:川島みどり)	1997. 5	(分担研究者) <u>薄井坦子</u> (研究協力者) <u>三瓶眞貴子</u> <u>岡部喜代子</u> <u>寺島久美</u> <u>阿部恵子</u> <u>奥悦子</u> <u>串間秀子</u> <u>菅沼ひろ子</u> <u>三宅玉恵</u> <u>赤星誠</u> <u>細野喜美子</u> <u>名原壽子</u>
2. Body segmental functions in the support phase of sprinting	Book of Abstracts of the International Society of Biomechanics p199	1997. 8	Kazuyuki Ogiso Toshifumi Yasui kiyohide Aoyama Atsuro Kushima
3. スポーツバイオメカニクス (1) (2) (3) 発育発達について	ラジオによるスポーツカウンセリングまとめ(宮崎県体育協会) p 73-84	1997. 12	串間敦郎
4. 早期曝露実習時の不安状態と学習内容。(資料)	鹿児島純心女子大学看護学部紀要 2:69-75	1998.	田中美智子 椎野志保 有松操 南家貴美代 樺山千和子 木場富喜
5. ヴィヴァルディ研究、ピアノ教育、講演活動を経て看護教育の世界に	ピアノの本 24(1):16-18	1998. 1	大村典子
6. みやざき・民俗マップ	宮崎日日新聞(連載47回)	1998. 1~12	山口保明
7. 精神保健における地域ぐるみの危機管理体制づくり	平成9年度先駆的保健活動研究助成報告書 (日南保健所)	1998. 2	中村敏子 小野美奈子 塩満ちほ 綿田浩子 松浦由美子 山内裕子 池袋貞子 瀬尾のり江 武田靖子 蛇原夕起子

表題	発行所	発行年月日	著者
8. 看護学生に、なぜ学問論が必要か	「学問論」が看護学生になぜ必要か 第1集 P5-34	1998. 2	加藤幸信
9. 平成9年度陸上競技国体選手のスプリント走のフォームの分析（研究報告書）	97宮崎スポーツ科学委員会研究報告書 P36-40	1998. 3	串間敦郎 中村民生
10. 魚類の概日リズム中枢の同定	平成8年—平成9年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書 P48	1998. 3	浅野昌充
11. フィールド体験実習1集録1997年度（報告）	宮崎県立看護大学	1998. 3	細野喜美子 串間秀子 高尾千賀子
12. 独学でもピアノが弾ける～音符が読めなくても思いきってピアノにトライ！	ムジカノーヴァ別冊・大人のピアノ～ピアノなんてこわくない P47-48	1998. 8	大村典子
13. 誰でもできる“ファミリー連弾”～コミュニケーションの輪を広げよう！	ムジカノーヴァ別冊・大人のピアノ～ピアノなんてこわくない P40-41	1998. 8	大村典子
14. 地域環境と生命・生活－健康づくりと地球にやさしい暮らしの工夫	宮崎県大学・短大・高専ネットワーク公開講座（宮崎県立看護大学） 財団法人宮崎県看護学術振興財団助成事業（1998年度）	1998. 9～11 6回実施 1999. 3 まとめの小冊子発行	名原壽子 長坂猛 外京ゆり 串間秀子 大名門裕子 奥悦子 大村典子
15. 「日本のうた」でファミリー連弾～世代間コミュニケーションが高齢化社会を元気にする	ムジカノーヴァ別冊・いまピアノ教室が変わる一大人の生徒がやって来た P83-85	1998. 12	大村典子
16. フィールド体験実習1集録1998年度（報告）	宮崎県立看護大学	1999. 1	細野喜美子 串間秀子 高尾千賀子
17. 私の学問論（第1部）	「学問論」がなぜ看護学生に必要か 第2集 P43-56	1999. 2	汲田克夫
18. 学問と歴史的社会・<I> オリエント社会	「学問論」が看護学生になぜ必要か 第2集 P60-70	1999. 2	加藤幸信
19. 学問と歴史的社会・<II> 古代社会I	「学問論」が看護学生になぜ必要か 第2集 P71-82	1999. 2	加藤幸信

表題	発行所	発行年月日	著者
20. 学問と歴史的社会・<III> 古代的社会II・中世的社会	「学問論」が看護学生にな ぜ必要か 第2集 P 83-90	1999. 2	加藤幸信
21. 看護の為の語学教育	1997-1998年度 宮崎県看護学術財団研究 報告	1999. 3	宇久真雄 エリック・ラーソン 川北直子
22. music nursing care の試案	宮崎県看護学術振興財団 助成事業	1999. 3	大村典子
23. 平成10年度陸上競技国体選手のスプリント走のフォーム の分析 (研究報告書)	98宮崎スポーツ科学委員 会研究報告書 P 19-24	1999. 3	串間敦郎 中村民生
24. フィールド体験実習の評価 (研究報告書)	財団法人 宮崎県看護学術 財団	1999. 4	細野喜美子 串間秀子 高尾千賀子
25. 看護も音楽療法も人間理解・共感が大切	ムジカノーヴァ 30(9) :48-49	1999. 9	大村典子
26. 日本列島文化交流誌 「江戸期俳諧交流」	青 (創刊号)	1999. 9	谷川健一 小野有吾 山口保明 柳田富美子 馬場あき子 市川健夫 道浦母都子
27. 講演活動20周年を迎えて	ピアノの本 26(1) :16-19	2000. 1	大村典子
28. 日本列島文化交流誌 「柳田と宮崎ところどころ」	青 (第2号)	2000. 2	山口保明
29. 学問と歴史的社会・<IV> 古代的社会II	「学問論」が看護学生にな ぜ必要か 第3集 P 62-74	2000. 3	加藤幸信
30. 学問と歴史的社会・<V> 中世的社会から絶対主義社会へ	「学問論」が看護学生にな ぜ必要か 第3集 P 75-86	2000. 3	加藤幸信
31. 私の学問論 (第2部)	「学問論」がなぜ看護学生 に必要か 第3集 P 51-59	2000. 3	汲田克夫
32. 平成11年度陸上競技国体スプリント系選手の体力要素の 検討	99宮崎スポーツ医科学委 員会報告書	2000. 3	串間敦郎 中村民生
33. 競技力強化推進校のメディカルチェック	99宮崎スポーツ医科学委 員会報告書	2000. 3	廣田彰 高橋るみ子 串間敦郎
34. 看護学生に贈る“自然科学の基礎知識”第1集 P 1-48	宮崎県看護学術振興財団 の助成で発行	2000. 3	小河一敏 邊木園幸 久野暢子

5 学会発表

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
1. Rickettsia tsutsugamushi 接種マウスにおける血中サイトカインの変動を中心として—	第71回日本感染症学会総会(札幌)	1997. 4	長友安弘 村井幸一 堀之内寿人 佐々木隆 岡本将幸 松山幹太郎 志摩孝 塩入重正 岡山昭彦 坪内博仁 橘宣祥
2. 患虫病急性期における感染防御機構の解析—血中サイトカインの変動を中心として—	第94回日本内科学会総会(大阪)	1997. 4	長友安弘 村井幸一 堀之内寿人 佐々木隆 志摩孝 塩入重正 岡山昭彦 坪内博仁 橘宣祥
3. Yersinia enterocolitica (O:8型) 敗血症の一例	第71回日本感染症学会総会(札幌)	1997. 4	内山真主美 石川守 保坂茂透 赤星透生 飯国弥純 岡田啓文 近藤志 笠原武志 島内千恵子 井上松久
4. C. freundii のパルスフィールドDNA型別と薬剤耐性型	第45回日本化学療法学会総会(東京)	1997. 6	井上松久 島内千恵子 佐藤優子 岡本了一
5. Inverse association between the prevalence of abnormal lymphocytes and smoking among HTLV-I carriers in Japan.	Eighth International Conference of Human Retrovirology (Rio, Brazil)	1997. 6	Okayama A. Tachibana N. Tsubouchi H. Stuver S. Mueller N.
6. ストレスが妊娠に及ぼす影響	第23回日本看護研究学会(久留米)	1997. 7	田中美智子 木場富喜 須永清 石川稔生

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
7. Diagnosis and treatment of multi-resistant S. aureus (シンポジウム)	20th International Congress of Chemotherapy (Sydney)	1997. 7	井上松久 久我明男 島内千恵子 岡本了一
8. 「教育方法の新たな試み」 —モジュール学習— (シンポジウム)	日本看護学教育学会 第7回学術集会 (神戸市)	1997. 8	薄井坦子
9. 下肢切断を受容する過程への援助	千葉看護学会第3回学術集会	1997. 9	阿部恵子
10. 周産期におけるプライマリーヘルスケアの実践報告 —助産院10年間の活動の軌跡—	宮崎県母性衛生学会 (宮崎市)	1997. 10	菅沼ひろ子 串間秀子 池田利江
11. 大船渡湾の成層と貧酸素水塊に関する現地観測	第44回海岸工学講演会 (岐阜市)	1997. 11	長坂猛 鶴谷廣一 村上和男 浅井正 西守男雄
12. 新人看護教員の悩みと受けたい支援との関連	第17回日本看護科学学会 (神戸市)	1997. 12	長井恵子 名原壽子
13. 感染看護領域の専門性と発展に寄与する研究	第17回日本看護科学学会総会、交流セッション (神戸)	1997. 12	島内千恵子
14. 援助困難として訪問依頼を受けた事例の看護学的構造	第17回日本看護科学学会学術集会 (神戸市)	1997. 12	小野美奈子
15. 黄色ブドウ球菌の鼻腔内保菌状況の検討	第13回日本環境感染学会 (東京都)	1998. 2	島内千恵子 平尾百合子 稻木勝英 鈴木立俊 邊木園幸 橘宣祥 井上松久
16. 看護技術教育における授業改善への試み (I報) —看護技術のイメージ形成を促す学習支援システムの導入経過と現状について	日本看護研究学会 第2回九州地方会 (鹿児島 川内市)	1998. 3	栗原保子
17. 更年期女性の心身不調とその生活背景 —自覚症状とライフイベントに対する負担度からみる—	日本助産学会 (東京)	1998. 3	菅沼ひろ子

表 題	学 会 ・ 研 究 会	発 表 年 月 日	発 表 者
18. 宮崎県南部地方の抗 Orientia tsutsugamushi 抗体の保有状況について	第72回感染症学会総会(大阪市)	1998. 4	松山幹太郎 村井幸一 長友安弘 黒木昌幸 佐々木隆 岡本将幸 志摩孝 岡山昭彦 橋宣祥 坪内博仁
19. 気道での MRSA に対するムピロシン鼻腔用軟膏の除菌効果および菌の同一性に関する研究	第95回日本内科学会講演会(福岡)	1998. 4	渡辺浩 真崎宏則 G. Maetinez 渡辺貴和雄 大石和徳 永武毅 永尾敬美 島内千恵子
20. 老人病棟重症患者観察室における患者および環境由来 Methicillin-sensitive S.aureus (MSSA) の分子疫学的解析	第95回日本内科学会講演会(福岡)	1998. 4	真崎宏則 G. Martinez 渡辺貴和雄 大石和徳 永武毅 麻生憲史 田尾操 松本慶蔵 島内千恵子
21. MRSA 腸炎における菌の侵入経路についての研究	第72回日本感染症学会総会(大阪)	1998. 4	渡辺浩 真崎宏則 渡辺貴和雄 大石和徳 永武毅 繩田康郎 池田秀樹 永尾敬美 佐藤晃嘉 島内千恵子

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
22. 老人病棟 MRSA 専用室における便由来黄色ブドウ球菌の分子疫学的解析	第72回日本感染症学会総会(大阪)	1998. 4	真崎宏則 渡辺浩 渡辺貴和雄 大石和徳 永武毅 田尾操 池田樹 坂本翊 松本慶蔵 島内千恵子 井上松久
23. 老人病棟 MRSA 専用室における褥創由来黄色ブドウ球菌の分子疫学的解析	第72回日本感染症学会総会(大阪)	1998. 4	麻生憲史 田尾操 池田樹 坂本翊 松本慶蔵 真崎宏則 渡辺浩 渡辺貴和雄 大石和徳 永武毅 島内千恵子 井上松久
24. Effects of hypobaric hypoxia and/or iron deficiency anemia on brain and muscle metabolism in rats.	In the 3rd world congress on mountain medicine and high altitude physiology and the 18th Japanese symposium on mountain medicine. (Matsumoto)	1998. 5	Tanaka M. Arimatsu M. Tsujino K. Hamada R. Koba F. Kobayashi T. Ohira Y. Honda Y.
25. MRSA の疫学 (パネルディスカッション)	日本防菌防黴学会第25回年次大会(東京)	1998. 5	島内千恵子
26. フィールド体験実習の地域看護学的評価 —大学課程1年次に取り入れた1地区の家庭訪問実習の意義—	第1回日本地域看護学会(東京都)	1998. 6	小野美奈子 中村千穂子 松本憲子 名原壽子
27. ストレスが妊娠経過に及ぼす影響	第24回日本看護研究学会(弘前)	1998. 7	田中美智子 辻野久美子 有松操 椎野志保 木場富喜 須永清 石川稔生

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
28. 運動負荷が循環機能に及ぼす影響	第24回日本看護学教育学会(弘前)	1998. 7	田中 美智子 上野 早月 江藤 美佐 大土橋 香奈 高越 親子 本山 真里子
29. MRSA の疫学調査、感染に関するワークショップ	感染に関するワークショップ(神奈川)	1998. 7	島内 千恵子
30. Body segmental functions in the support phase of sprinting	第16回国際バイオメカニクス学会(東京都立大学) X VI th Congress of the International Society of Biomechanics	1998. 8	Kazuyuki Ogiso Toshifumi Yasui Kiyohide Aoyama Atsuro Kushima
31. 地域看護の概念理解を促進する教育教材の持つ要素 —松川町健康を考える集会20周年記念文集をよんだ大学過程1年生の感想文を分析して—	第8回日本看護学教育学会(北九州市)	1998. 8	中村 千穂子 松本 憲子 小野 美奈子 名原 壽子
32. 地域看護の提唱者小林富美栄の看護教育改革—先駆的取り組み—	第12回日本看護歴史学会(別府市)	1998. 8	名原 壽子
33. 更年期女性の体験するライフイベント —「つらさの程度」と家族背景—	日本家族看護学会(相模原市)	1998. 9	菅沼 ひろ子 串間 秀子 宮里 和子
34. 看護大学1年生のツベルクリン反応検査結果からみた2段階ツベルクリン反応検査の意義	第57回日本公衆衛生学会総会(岐阜)	1998. 10	松本 憲子 名原 壽子 中村 千穂子 古家 隆 益留 真由美 高藤 ユキ 栗山 義明 杉尾 和久 森 亨
35. How do adolescents with life-threatening illness in Japan receive and understand the information about their illnesses?	第30回国際小児がん学会(横浜市) Medical & Pediatric Oncology 31(4):207	1998. 10	Tamae Miyake

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
36. 老人病棟 MRSA 専用室における患者皮膚および環境由来黄色ブドウ球菌の分子疫学的解析	第68回日本感染症学会西日本地方会総会（山口）	1998. 11	真崎 宏則 麻生 憲史 渡辺 浩 渡辺 貴和雄 大石 和徳 永武 豪 田尾 操 池田 樹 坂本 翔 松本 蔵 島内 千恵子 井上 松久
37. 癌患者の回復過程の構造 —認識の転換点の分析を通して—	第13回日本がん看護学会学術集会（東京）	1998. 12	外京 ゆり
38. 重症熱傷患者に関わる医療従事者および病室環境のMRSA 検査報告	日本皮膚科学会第89回宮崎地方会（宮崎市）	1998. 12	邊木園 幸 島内 千恵子 渡辺 よ子
39. 新人看護教員が抱える悩み	第18回日本看護科学学会（札幌市）	1998. 12	坂井 恵子 名原 壽子
40. 鉄欠乏性貧血が身体組成、骨格筋代謝及び日常自発運動量に及ぼす影響	第76回日本生理学会大会（長崎）	1999. 3	田中 美智子 大平 充宣 小林 敏生 本田 良行
41. MRSA 専用室における患者由来黄色ブドウ球菌と環境由来黄色ブドウ球菌の関連性に関する分子疫学的解析	第73回日本感染症学会総会（東京）	1999. 3	真崎 宏則 麻生 憲史 渡辺 浩 光嶋 博昭 池田 樹 渡辺 貴和雄 大石 和徳 永武 豪 田尾 操 坂本 翔 松本 蔵 島内 千恵子 井上 松久

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
42. 宮崎県南部地方の抗 Orientia tsutsugamushi 抗体の保有状況と特異抗体の経時的变化	96回日本内科学会総会(東京都)	1999. 4	村井幸一 松山幹太郎 志志目栄一 長友安弘 井幸一 長友安弘 黒木昌幸 佐々木隆 岡山昭彦 橋宣祥 坪内博仁
43. 鉄欠乏又は低圧曝露が血液性状及び心筋に及ぼす影響	第19回日本登山医学シンポジウム(富山)	1999. 5	田中美智子 大平充宣 小林敏生 本田良行
44. 炭酸ガス一換気応答に対する頸動脈体の関与度の推定	第19回日本登山医学シンポジウム(富山)	1999. 5	本田良行 田中美智子 増田敦子 小林敏生
45. 低酸素及び性差が炭酸ガス換気応答及び呼吸困難に及ぼす影響	第19回日本登山医学シンポジウム(富山)	1999. 5	増田敦子 大藪由夫 田中美智子 小林敏生 本田良行
46. 更年期女性の健康意識と心身不調の自覚症状	日本助産学会(札幌市)	1999. 5	菅沼ひろ子 串間秀子 宮里和子
47. 保健所保健婦が固有の機能を發揮するための必要条件	第2回日本地域看護学会(山梨県)	1999. 6	小野美奈子
48. 明暗サイクルの変化が妊娠時の体組成及び自発運動量に及ぼす影響	第25回日本看護研究学会(浜松)	1999. 7	田中美智子 長坂猛 須永清 石川稔生
49. 宮崎県の神楽について	宮崎県民俗学会(宮崎市)	1999. 8	山口保明 原田解
50. 看護者が意外と感じた看護場面の分析から	第5回千葉看護学会(千葉市)	1999. 9	久野暢子
51. 献体登録者の健康観	第5回日本臨床死生学会(長岡市)	1999. 10	赤星誠 中島香織 松迫睦美 赤星成子

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
52. ジルドラトレット症候群の2症例—心理社会的側面からのアプローチ—	日本児童青年精神医学会 第40回(札幌)	1999. 10	船越俊一 山下祐一 本多奈美 佐藤光源 布施裕二
53. 「入院による母子分離」が母子の「共生」関係の改善に有効であった一例	日本児童青年精神医学会 第40回(札幌)	1999. 10	本多奈美 山下祐一 船越俊一 工藤亜子 佐藤光源 布施裕二
54. ナイチンゲール看護論を基盤にした「災害看護」教育を考える試み	ナイチンゲール研究学会 第20回研究懇談会(宮崎市)	1999. 10	寺島久美 阿部恵子
55. 哺乳びんの消毒に関する実態調査及び消毒・洗浄方法の検討(第1報)	平成11年度宮崎県母性衛生学会(宮崎)	1999. 10	若松由佳子 川原端代 渡邊久美 島内千恵子 菅沼ひろ子 串間秀子
57. 看護の為の語学教育	第15回大学英語教育学会 九州・沖縄支部研究大会(運輸省航空大学校、宮崎)	1999. 11	川北直子
58. 宮崎の民俗文化	第5回宮崎を考える会(宮崎市)	1999. 12	山口保明 矢口裕康
59. 看護技術教育における授業改善の試み —<Video on Demand>システムの開発プロセスと授業の実際—	第19回日本看護科学会学術集会(静岡市)	1999. 12	栗原保子 邊木園幸 久野暢子
60. 重症熱傷患者に関わる医療従事者および治療環境から検出されたMRSAの検討	第15回日本環境感染学会(別府市)	2000. 2	邊木園幸 島内千恵子 橘宣祥 渡辺よ子 前田俊一 中山文子 長嶺英宏

表題	学会・研究会	発表年月日	発表者
61. 宮崎市とその周辺地区で分離された MRSA の検討	第15回日本環境感染学会 (別府市)	2000. 2	島内千恵子 邊木園幸 毛利千祥 遠嶋美津子 山岡深雪 川元裕子 今藤さとみ 中村千穂子 長坂猛 小河一敏 橘宣祥 齐藤宏 佐伯裕二 宮越恆之 井上松久 高尾千賀子
62. フィールド体験実習1における学生の学び——精神障害者の生活を支える人々との出会いから——	第4回日本看護研究学会 九州地方会	2000. 3	菅沼ひろ子 串間秀子 川原端代 若松由佳子 渡邊久美 宮里和子
63. 昭和20年代の出産体験者の語る妊娠と出産 —宮崎県高千穂町の在住者に聞く—	第14回日本助産学会学術集会(鹿児島)	2000. 3	田中美智子 長坂猛 須永清 大平充宣 本田良行
64. 鉄欠乏性貧血及び運動が骨格筋代謝に及ぼす影響	第77回日本生理学会大会 (横浜)	2000. 3	

6 講演・その他

表題	会合名・開催地	発表年月日	氏名
1. すぐれた実践にひそむ法則性をほりおこす取り組み	シンクタンク宮崎	1997. 9	薄井坦子
2. 地域の健康を支える	第9回宮崎県国保地域医療学会(宮崎市)	1997. 11	薄井坦子
3. 生きる力を育てる、育ちを見守る	第13回自閉症児・者親の会 九州大会(宮崎市)	1998. 6	名原壽子
4. 看護学生の可能性を引き出す法	第37回九州地区准看護婦教育学会(宮崎市)	1998. 8	大村典子
5. 21世紀を豊かに生きるために—高齢社会の福祉と生涯学習—(シンポジウム)	宮崎大学創立50周年記念事業	1998. 9	薄井坦子 黒木茂夫 西亮 長谷場チカ
6. 公衆衛生看護の歴史	国立公衆衛生院(東京)	1998. 9	名原壽子
7. 女性のライフサイクルと助産婦の役割	県立宮崎保健婦助産婦学院(宮崎市)	1999. 2 2000. 3	串間秀子
8. イキイキ生きよう～プラス志向のすすめ	第26回九州身体障害者施設研究大会(宮崎市)	1999. 2	大村典子
9. 見つけよう！音楽の可能性(シンポジウム)	'99音楽療法全国フォーラム in みやざき	1999. 3	松井紀和 大村典子 齊藤考由 根井翼 山下恵子
10. 人権感覚を磨く	宮崎県人権啓発協会総会(宮崎市)	1999. 5	汲田克夫
11. イキイキ生きよう～元気とやる気のアドバイス	第47回日本輸血学会・市民公開講座(仙台市)	1999. 5	大村典子
12. 仏教と人権	九州地区真言宗研究会(宮崎市)	1999. 6	汲田克夫
13. 現代教育の課題	宮崎地区放送大学センター	1999. 8	汲田克夫
14. 看護学生にもっと豊かな感性を	第30回中四九地区医師会看護学校協議会(宮崎県延岡市)	1999. 8	大村典子
15. 人々のもてる力をひき出す看護	第30回中四九地区医師会看護学校協議会(延岡市)	1999. 8	薄井坦子
16. 文化の伝承について(基調講演)	第8回全国ボランティアフェスティバル・文化伝承とボランティア活動部会(宮崎公立大学)	1999. 10	山口保明

表 題	会合名・開催地	発表年月日	氏名
17. いま、女性相談員と心理判定員に求められるもの～より よいコミュニケーションをめざして	厚生省平成11年度全国婦 人相談員、心理判定員研究 協議会（宮崎市）	1999. 10	<u>大村典子</u>
18. 障害者の社会参加～アートでハートを（シンポジウム）	総理府平成11年度障害者 施策推進地域会議・中国、 四国、九州地区（宮崎市）	1999. 10	<u>大村典子</u> <u>山田良一</u> <u>黒木房子</u> <u>広瀬恵</u> <u>斎藤洋明</u>
19. もっとアクティヴで魅力的な授業を！～音楽の楽しさが 体感できるように	第40回九州音楽教育研究 大会（宮崎市）	1999. 11	<u>大村典子</u>
20. 21世紀の看護に期待されるもの	県立宮崎保健婦助産婦学 院閉校記念講演会	2000. 3	<u>薄井坦子</u>